

彙 報

本学会報ほか

○本会総会（1966年度）—7月2日午後2時～2時半、於京大文学部地理学実習室。本年度第1回例会—前記総会終了後2時半より於同教室、末尾至行氏「イラン・アフガニスタンの農村調査について」（8mm 映画）（日本オリエント学会関西西部会第12回例会と共催）。○京都大学第6次イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査隊（考古美術班のみ）（1965年7月～66年1月）は水野清一教授を隊長に有光教一・田中重雄・藤田国雄・西川幸次・小谷伸男・浪貝毅・桑山正進の諸氏で構成。水野・藤田・小谷3氏はIranに渡り、8月末Afghanistanで他隊員と合流、9月～11月中旬Qunduzで2つのテベを発掘、以後1月中旬迄印パ紛争のためAfghanistanにとどまり、Jelalabadで仏教石窟群と仏塔址とを測量・発掘した。なお第5次調査の報告書として吉田光邦・小山喜平両氏共著『西アジアの技術1964』が発行された（京都大学1966年）。豊富な写真やスケッチによって理解を助け地図2葉を付した豪華版。○羽田記念館（京大内陸アジア研究施設）は4月13日午前11時より竣工式を挙る。鉄筋コンクリート二階建てで階下にはホール、応接室があり、階上は研究室にわかれ、西アジア、中央アジア、インドに関する数千冊の書物を収蔵する。本記念館については本誌No. 13 参照。

会 員 消 息

○沢山国治氏（日東汽船重役）は1965年度以来賛助会員としてご援助いただくことになった。○岩村忍氏（京大人文科助教授・京大東南アジア研究センター所長）は「東南アジア諸国の現地実態調査」のためタイ・カンボジア・マレーシア連邦・インドネシア・フィリピンに出張（1月9日～1月29日）、同じく「アメリカにおける東南アジア研究資料蒐集ならびに人間関係資料集年次理事會出席」のため北米合衆国に出張された（3月21日～4月24日）。同氏の『アジアの見方』は2月16日発行（講談社現代新書69）。○井上智勇氏（京大文学部長）は1月15日付で学部長を辞任された（なお同教授はその後健康を完全に回復された）。○岡崎正孝氏（前号参照）は1月16日帰国された。○勝藤猛氏（大阪外大助教授〔2月12日付〕）の『クビライ・カーン』は2月15日発行（人物往来社）。○大野盛雄氏（東大東洋文化研究所助教授）は「遊牧民の研究」のため2月16日発テヘランへ、帰国は10月中旬の予定。○吉田光邦氏（京大人文科助教授・本誌編集部員）の『ペルシアのやきもの』は2月23日発行（淡交新社）（同氏の別著については上記の会報参照）。○水津一郎氏（京大文学部助教授）は「集落・社会地理学の研究」のため西独・スエーデンへ（3月15日～1967年3月14日）。○善波周氏は京大文学部専任講師を3月末停年退官、4月1日付で仏教大学教授に就任された。○4月1日付で異動された会員諸氏：恵谷俊之氏（本会幹事）・酒井敏明氏（共に東海大学文学部専任講師へ）、末尾至行氏（関西大学文学部助教授へ）、寺田隆信氏（東北大学文学部助教授へ）、藤吉慈海氏（花園大学教授へ）。○羽田明氏（京大教養部教授・本誌編集部長）はパリの日本館々長を辞任、イスタンブール・テヘラン経由4月11日羽田に帰着された。○大岩川和正氏（アジア経研調査研究部中東調査室）は「イスラエル農村の社会経済構造研究」のため4月15日発エルサレムへ。ヘブライ大学在籍、1968年4月帰国の予定。○森鹿三氏（京大人文科研所長）の『アジア歴史地図』（松田寿男氏と共編）は4月末発行（平凡社）。（以下の会員消息および京大文学部西アジア南アジア史学講義題目は次号）

あ と が き

○本会も発足以来こととして10年目。一関また一関、苦難の連続ではあったがよくも越えてきたもの。会長はずっと足利惇氏先生、編集陣も5号以来今の体制、人の和が会員諸氏や執筆者各位に支えられて、よく今日あるを得しめたと感謝にたえない。○第16号を贈る。新進の長大作2篇と、海外からはイラン学の行方を占いでもするようなドレスデン教授の「レポート」がいただけた。前者は京大オリエント学の前途を展望させるに十分であり、後者は広く本誌を海外にも押しすすめるに好例の手記、共に本号を異彩あらしめるものとなった。〔編集部記〕